



イタリアにおける ヴィラ・庭園・風景の統合

第5回

ヴィラ・ジュリア——都市の中心からの逃避

野口昌夫 | 東京藝術大学美術学部建築科 教授

大島 碧 | 東京藝術大学美術学部建築科 教育研究助手



野口

大島

イタリアのヴィラにおけるスケール横断的空間構成手法「風景の統合」の理論とその実践例について紹介してきた。ヴィラ建築では、都市の眺めと他の領地の眺めが重要な意味をもち、フィレンツェ周辺ではランドスケープとその基準点となるブルネレスキのクーポラを中心としたパノラマを得るために、「風景の統合」が自然発生的に生じた。

一方、ローマでは、ヴィラの形態や眺めは都市構造とより密接に関わりながら成立している。ここで紹介する教皇ユリウス3世のヴィラ・ジュリアは、市壁の外側の谷に位置し、丘の上のヴィラのような都市を見下ろす眺めをもたない。こうした特殊なヴィラの構成は都市の中心であるヴァティカンと対をなすものとして関係づけられていた。

立体的な三層構成

ヴィラ・ジュリア建設の予備工事が開始されたのは1550年、ジョルジョ・ヴァザーリ、ミケランジェロ、ヴィニョーラ、アンマナーティなど当時の著名な建築家が携わった。敷地はテヴェレ川沿いの一帯までを含み、新しい港をつくることでヴィラとヴァティカンを結びつけた(図1)。ヴァティカンとカステル・サンタンジェロを連結する屋根付きの通路を通過して川に出る地点から、来賓を乗せた教皇の豪華な船が出ていた。船が到着する地点からは、バーゴラがフラミニア街道に面した正門まで続き、ヴィラに導かれた。

敷地はローマの市壁の外側に位置しているため、ヴァティカンと都市内部のつくる強い軸性による相互視認のシステムからは独立した形をとっている。現在のヴィットーリオ・エマヌエーレ2世記念堂から発する軸線ヴィア・デル・コロンポがポポロ広場に至り、市壁を越えると、テヴェレ川からヴィラ・ジュリアへ至るアプローチの動線と交差する。

市壁内部のヴィラが見晴らしのよい丘の上の立地を好み、都市を見渡すパノラマの眺望をいかに獲得するかを重視していたのに対して、ヴィラ・ジュリアは閉じられた内向的な構成をとる。建物と庭園はより親密な関係を示し、動線は簡素で入口から奥へ主軸線に沿ってまっすぐに進む構成となっている。平面・断面ともに三層構成がとられ、平面で真中の庭にあたる部分から下の二層にアクセスできる(図2)。ヴィラ・ジュリアで最も重要な眺望は、この三層構成の一番下のレベルから、建物の内部を通して望む周囲のランドスケープと空への眺めである。こうしたヴィラの空間構成は、建築とランドスケープの統合を提案したマニエリスム成熟期の姿を示している。

体験者がレイヤー状の構成を奥へ進むにつれて、建築的要素も

壮大な舞台装置としてのローマ

ローマにおける「風景の統合」は、フィレンツェより少し遅れて始まった。北からのプロテスタントによる1527年の「ローマ略奪」後、教皇はカトリックの権力復活を象徴化するプログラムを求めた。都市全体を用いた教会権力の表象としての軸線が再構成され、こうした背景のなかでヴィラ建築は相互視認性や都市のモチーフ(サン・ピエトロ大聖堂のクーポラなど)への眺望が設計に取り込まれることとなる。また、古代遺跡をもヴィラに取り込む手法などがあらわれた。

さらに、古代の復興としての純粋なルネサンス様式によるフィレンツェ周辺のヴィラに対して、古代(神話)と中世(キリスト教)を同時に信頼する価値観が求められた。それは、庭園に使用されているモチーフや要素などからも読み取れる(たとえばヴィラ・キジ・アルバーニでは、キリスト教と古代の神それぞれのグロッタが設置されている)。16世紀中頃の社会が大きく変化する時代にあって、ヴィラの構成にはマニエリスム的、バロック的仕掛けが多く見られ、より舞台装置的な技巧が発展していくこととなった。



図1 ヴィラ・ジュリア周辺図(P.ファン・デル・レー、G.スミンク、C.ステーンベルヘン共著、野口昌夫訳『イタリアのヴィラと庭園』鹿島出版会、1997より著者作成)

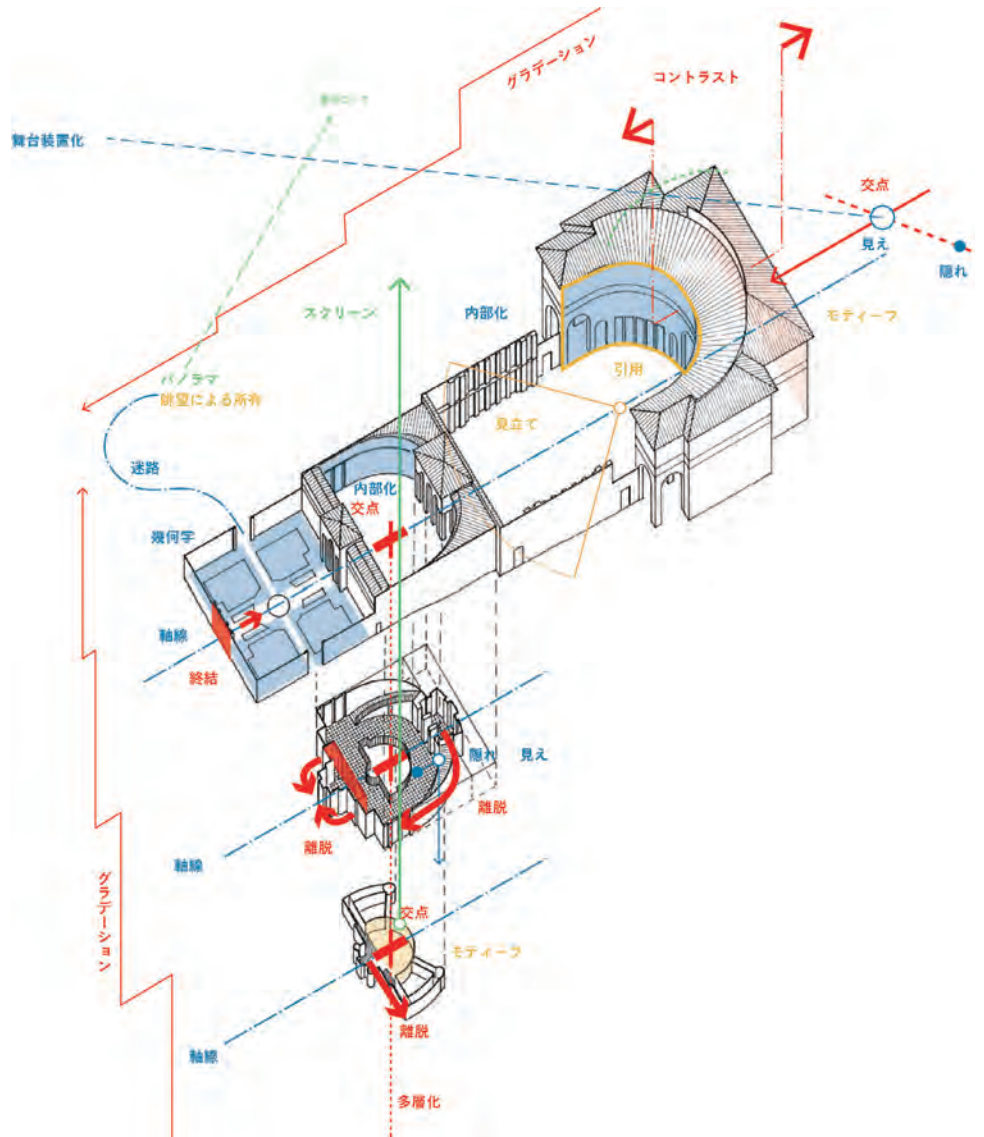


図2 ヴィラ・ジュリアアクソメ図(前掲書、1997より著者作成)



上から、写真1 アプローチ、写真2 ファサード①、写真3 ファサード②

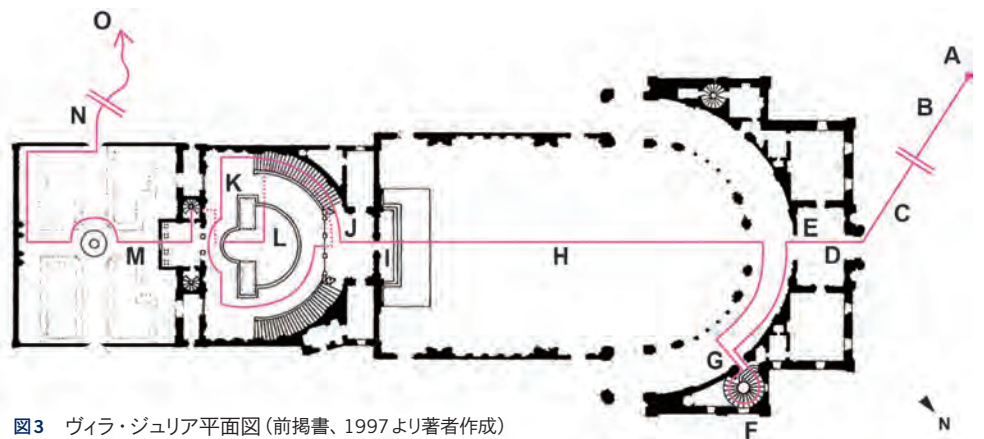


図3 ヴィラ・ジュリア平面図(前掲書、1997より著者作成)

変化していく。具体的には、空間の奥へ進むほど、スクリーンの開口の幅が広くなり、エレメントのヴォリュームと壁の高さが逡減する。このグラデーションの構成は、ヴィラ・ジュリアの主要なテーマであり、石材から植込みへと、素材が穏やかに移り変わるにもあらわれている。

軸線上での空間体験の中にローマへの眺望をもたないかわりに、パルケットの中いくつかの視点場が用意され、そこからは、谷にあるヴィラだけでなく、ヴァティカンのパラッツォ、カステル・サンタンジェロ、ヴィラ・マダマを遠くに見渡すことができた。



写真4 建物内部から見た第一の庭



写真5 ロジア



写真6 2階から見た第一の庭



写真7 内側からのファサード



写真12 第二の庭④



写真13 第二の庭から第一の庭の方向に振り返る



写真14 川の神の彫像



写真15 ジャルディーノ・セグレート①

シークエンス

現在は周辺環境が大きく変化しているため、当初設定されていた、建物に至るまでのアプローチや、ヤコボ・メネギーニによって植樹された周囲のランドスケープの樹々などは見ることができない。また、ジャルディーノ・セグレート(秘密の庭園)にも立ち入ることができない。シークエンスは一番奥の庭園のニッチで一度終結するが、当初、体験者はこのあと軸線システムから離脱し、バルケットの中から都市を眺める視点場まで導かれていた[図3]。

A…ヴァティカンからテヴェレ川を船で渡り、船着場に到着。

B…船着場からヴィラ・ジュリアの正門までは、パーゴラによって導かれる。

C…パーゴラの軸線とヴィラの軸線は角度が振られていて、ヴィラに近づくまではその存在は谷の中に隠されている。この2つの軸線(川に直行する線とヴィラの主軸線)が出会うところが、ヴィラの前庭であった。前庭から見るヴィラのファサードは、外部に対して厳格で閉鎖的なつくりになっている[写真1~3]。

D…周囲のランドスケープに目をやる。ランドスケープの樹々はすべて、ヴィラの平面計画に合わせて植樹されている。

E…建物の入口は主軸線上にあり、中に入ると第一の庭が見える[写真4]。

F…半屋外となったロジアの空間に出る。ロジアの回廊を進み、2階へと上がる[写真5]。

G…2階からは第一の庭が見渡せる。第一の庭は壁で囲まれており、その先の空間構成は、2階からでも伺い知ることができない[写真6]。

H…第一の庭に戻り、庭の側から建物を見ると、背面ファサードは、正面ファサードとは対比的に開放性のあるつくりである。また、その

立面は明らかにパンテオンから直接引用されていることがわかる。凱旋門のモチーフが、内外のファサードの印象をつなげる[写真7]。

要素は主軸線上に構成されている。主軸線に沿って、空間の奥へ進む。

I…第一の庭を区画する壁の中心には、開口部が設けられている。庭はプロセニウムとステージに見立てられている。第二の庭に入る[写真8、9]。

J…主軸線からはずれて、中段の庭へアクセスする[写真10~13]。

K…中段の庭には、川の神の彫像がニッチの中に置かれ、4本の樹木が中心を囲むように植えられている[写真14]。ここからは、さらにもう一層下のジャルディーノ・セグレートが見えている[写真15、16]。最下段へのアクセスは、隠された一対の階段が通じている。

ジャルディーノ・セグレートに到達する。最下段はさまざまな水のエレメントと苔むしたグロッタによる空間である。

L…周囲のランドスケープの樹々が、壁の上に見えてくる。上段の内壁にはランドスケープが描かれ、空に向かって2つの開口をもつニッチの上に鳥小屋が置かれていた。ここでは、眺望は見上げのためにあり、上ではなく下から地平線への眺望が設計されている。

ジャルディーノ・セグレートから地上に上がっていくと、空間は徐々に広がり、透過性を増していく。

M…主軸線に戻り、第三の庭に到達する。庭を囲む壁面はさらに低くなる。

主軸線は、第三の庭のニッチで終結する。移動は左右へと促され、敷地境界に沿ったいくつかのエレメントに向かう[写真17、18]。

N…バルケットの丘の上へは、彫像や植込みによって分節されたさまざまな小道を通って上ることができた。

O…森を構成していたバルケットの中には、いくつかのあずまや、鳥小屋、ロジアが眺望のきく地点に置かれ、そこからは、谷にあるヴィラだけでなく、ヴァティカンのパラッツォ、カステル・サンタンジェロ、ヴィラ・マダマを遠くに見渡すことができた。



写真8 第一の庭から第二の庭の方向を見る



写真9 第二の庭①



写真10 第二の庭②



写真11 第二の庭③



写真16 ジャルディーノ・セグレート②



写真17 第三の庭



写真18 主軸線からの離脱

まとめ

以上のようにヴィラ・ジュリアは、教皇ユリウス3世の私的な隠れ家としての性格が強かったために、市壁内の丘上のヴィラとは異なる眺望システムをもっていた。教皇が、ヴァティカンから屋根付きの通路を通過してテヴェレ川へと向かい、船で市壁の外まで移動し、船着場からパーゴラが正門まで続く一連のシークエンスの到着点としてヴィラ・ジュリアが位置づけられていたと考えられる。

このヴィラの計画に関わった建築家のひとりミケランジェロは、ローマの3つの都市骨格となる軸線を設定している(本誌第1回目掲載の図3を参照)。ヴィラ・ジュリアにおける庭園と風景の統合は、よりマニエリスム的、バロック的方法で演出された。こうしたシークエンスの中を教皇は舞台の演者として移動し、ヴィラと都市はその背景となった。そこには、丘上からの眺望の反転としての谷の中のジャル

ディーノ・セグレートがあり、他のヴィラのような都市を見渡す眺望ではなく、空のみが広がるパノラマが設定されていたのである。

写真1~18……大島碧撮影

のぐち・まさお

1954年東京生まれ。東工大建築学科卒業。AAスクール大学院留学後、東工大大学院修士課程修了。1981年からフィレンツェの設計事務所勤務、1983年からフィレンツェ大学都市・地域研究科留学。1995年博士(工学)。2008年から現職。専門はイタリア都市・建築史

おおしま・みどり

1987年東京生まれ。東京藝術大学建築科卒業。同大学院在学中にミラノ工科大学建築社会学部に留学。2014年修了。隈研吾建築都市設計事務所を経て、2020年東京大学工学系研究科建築学専攻博士後期課程修了、博士(工学)。2018年から現職。風景研究所共同主宰

自習型認定研修の設問

設問1

ヴィラ・ジュリアの敷地の特徴として正しくないものは次のどれか。

- a. 周囲の森の木々まで計画され植樹されていた。
- b. 丘の上ではなく谷に位置する。
- c. ヴィラの主軸線がヴァティカンの方へ向いている。

設問2

ヴィラ・ジュリアに用いられた設計手法として正しくないものは次のどれか。

- a. 庭園の要素の一部を舞台装置に見立てる手法。
- b. トロンプ・ルイユ(だまし絵)によって都市への眺望を補う手法。
- c. 高名な建築を直接引用する手法。



認定教材の設問への回答は、CPD情報システムのページ

<https://jaeic-cpd.jp/>

にアクセスのうえ、お願い致します。

※不正解の場合は、単位に登録できない場合があります。

※自習型教材の選択欄における会誌「建築士」選択項目は、平成28年1月より建築士会会員のみが表示項目になります。